

# ばんえい競馬の変遷

開催初期のばんえい競馬は粗削りなお祭りばん馬の延長でしたが、レースを重ねる中、関係者の創意工夫により、コースから騎手の服装まで次第に進化を遂げていきました。

## U字型から直線コースへ 障害の配置も紆余曲折

ばんえい競馬は発足から約三十年の間に改善に改善を重ね、少しずつ競技としての形を整えていきます。

コースは当初、四市ともに馬蹄型、U字型とも呼ばれるオープンコースを採用していました。これはお祭りばん馬の慣例にならうもので、ゴールした後、そりをすぐに隣のスタートラインに運べるという利点がありました。外側のコースの馬には不利となり、しばしば混乱を招きました。しかも旭川と北見のコースには、スタートから間もない地点に「障害」と呼ばれる深さ三〇から五〇センチ、幅約三メートルの溝が設けられていました。この溝を越えるとすぐにU字のターンに差し掛かり、各馬、先を争って内

側に殺到します。ここでスピードが掛かると危険なので、砂を盛って難路を設けました。これが後の「砂障害」です。さらにこれを過ぎると、高さ一・六メートルの土堤に砂を深々と盛った第三障害があつたのです。U字型コースは何かと問題が多かつたため、昭和三十八年にまず旭川が、昭和四十三年には残りの三市も直線



障害の変遷



何かと問題の多かつた初期のU字型コース。(写真/中西関松)

二百メートルのセパレートコースに統一しました。ただし障害は相変わらず三カ所のまま。高さ一・三メートルの第一障害の後、高さ五〇センチ、長さ二〇メートルの砂を敷き詰めた第二障害が続く、さらに高さ一・六メートルの第三障害が控えていました。昭和四十九年には、馬にこと

さら苦闘を強いる必要はないとの判断から中間の砂障害を廃止。こうして現在のような、二つの障害を越える独特のセパレートコースが誕生しました。

## 持ち寄りだったそりを 鉄製のそりに統一

ばんえい草創期、そりは騎手の持ち寄りか、または地元農家から借り上げたものでした。当然、長さも重さもまちまち。勝敗はその後の後端がゴール地点を過ぎたかどうかで決まるので長いそりは不利になります。「これでは公正な勝負にならない」と観客からも物言いがつき、主催者が統一して造るようになりました。

最初はお祭りばん馬で馴染みのある木製の荷そりが使われていました。雨に濡れるとずっしりと重くなり、古くなると変形する恐れもありました。さらに木材の確保が難しくなつたため、昭和四十六年からは鉄製のそりが使われるようになり、その後も改良が重ねられました。

## わら袋からコンクリート製、 鉄製へと進化した重量物

その上のにのせる重量物（おもり）も、当初は極めて原始的なものでした。穀類などを入れるわら製の袋「カマス」を持ち寄り、馬場の砂を詰めて重さを測つたのが重量物の始まりです。ですが砂を詰めたカマスは損傷しやすく、木製のそりと同じように雨が降ると重くなるため、昭和三十五年には、取っ手のついたコンクリート製のものに変更されました。これなら大丈夫と思いきや経年とともに欠損してくることが判明。試行錯誤の末、昭和五十一年には全鋼鉄製へと進化した。

重量物は当初、騎手やきゅう務員がロープでそりに縛りつけていましたが、それではあまりにも野暮。そこで工夫に工夫を重ね、そりに箱型重量物をナット留めして固定し、その箱の中に重量物を納め、さらにナットで固定するようにしました。こうして、現在の重量物の原形となるスタイルが少しずつできていったのです。

## 馬を操る技術も変遷 立ち乗り禁止の時代も

初期の頃、騎手は立ち乗りで、積み上げたカマスの上から馬を操っていました。障害を登る時は少しでも重量を軽くしようと、自ら跳び上がる騎手も多かつたそうです。危険な上に見た目も悪いため、この跳び上がりは禁止に。さらに立ち乗りが禁止されていった時期もありました。ところが、「立った」「いや立っていない」と審判の決定に不満が爆発し、大騒ぎになることも。立ち追いでなければ馬の全能力を引き出せないことも理解され、昭和三十八年に「立ち乗り禁止」が解除されました。

手綱の余った部分で馬を打つようになつたのは、昭和四十年から。それまでは馬を打つことは禁止されていましたが、やはり馬の能力を引き出すために解除されました。「手綱の余った部分」としたのは、打つ力が制限されることで馬の条件反射を刺激するに留まり、残酷な行為には当たらないとの判断からでした。



昭和35年のレース風景。そりはまだ木製、重量物はコンクリート製。騎手が座ったまま馬を操っているのは、立ち乗りが禁止されていたため。(写真/狂田喜興志)

**鉢巻きと白シャツで始まった  
騎手の統一ユニフォーム**

初の公式ばんえい競馬に姿を現した騎手たちは、全員がねじり鉢巻き姿。シャツはとりあえず白色で揃えたものの、半袖あり、長袖あり、ワイシャツあり、ランニングシャツあり。下も乗馬ズボンに長靴あり、半ズボンに地下足袋ありと、服装はてんでばらばらでした。お祭りばん馬しか手本がなかったのですから、無理ありません。

さすがに公営となった昭和二十四年からは、ねじり鉢巻きのかわりに運動帽、白シャツに胸ゼッケンを着けることになりました。昭和三十三年には「すいか帽」と呼ばれる縞模様様の帽子に統一され、服は濃いグリーンの中袖シャツに。昭和四十四年には、平地競馬と同じように騎手の服装を登録制にし、騎手個人の服色が決まりました。さらに翌年には、全国の競馬と同様、騎手帽の色を一枠から順に白、黒、赤、青、黄、緑、橙、桃の八色とし、馬に着けるゼッケンも、騎手の帽子の色と統一されました。騎手がヘルメットを着用するようになったのは、昭和五十

年からのことです。

ばんえい競馬の発足当時、騎手の重量には制限がありませんでした。公営四年目の昭和二十八年、重量を一律七十五キロに決めると、体重の軽い騎手は布袋や風呂敷に砂や石を入れて、体重を補ったそうです。その後、南京袋にひもをつけたものに統一されましたが、見た目が悪く、昭和四十五年からは現在のような重量カバンに必要な重量の鉄片を入れるようになりました。騎手重量はその後何度か改正され、現在は七十七キロとなっています。

**かつては人馬別々の入場  
スタートは赤旗で合図**

当初、下見所（パドック）から馬場に出る時は、馬はきゅう務員にひかれて、騎手とは別々に入場していました。これは、農耕や運搬に使われる馬たちは農耕具や荷車をひくよう調教されており、人を背に乗せるのは一般的ではなかったためです。

騎手が騎乗して入場するようになったのは昭和四十五年から。ばんえいの競走馬は鞍もあぶみもつけていません。裸馬に等しい巨大

なばん馬に騎手が軽々と跳び乗り、颯爽と入場する光景は、この時からお目見えしたのです。

レースのスタートは、昭和四十六年に電動式スターティングゲートが登場するまで、スターターが赤旗を振って合図を出していました。馬一頭につききゅう務員が一人つき、スタートの赤旗が振られるや否や馬を放します。ところがこの時、勝たせたい一心で馬の尻を叩いたり、馬を引っ張って五、六メートルも走ったりする人がいたため、公正上の問題が指摘されました。電動式ゲートの導入によってこれらの問題も解消され、各馬一斉に飛び出す豪快なスタートが実現したのです。

**審判の公正を躍進させた  
スリットカメラやVTR**

着順判定は、かつてはすべて肉眼で行われていました。ゴール前に「六角堂」と呼ばれる審判台があり、審判委員がそこからゴールインする馬の順位を判定していました。

平地競馬に遅れること十年、昭和三十八年からは着順判定写真が採用されましたが、馬が一团となってゴールすると、勝敗を決めるその後ろ端が馬体に隠れてしまい見えないこともあります。そのためスタンドと向かいの両側から撮影する方式を採用。昭和四十三年までには、四市ともスタンド正面の対面となる側に、カメラを備えた対面タワーが設けられました。使用される着順判定写真機は、平地競馬と同様、スリットカメラと呼ばれる特殊なもの。レンズとフィルムの間にはスリット（細い隙間）があり、フィルムを一定速度で巻きながら撮影することで、ゴールの瞬間の一瞬一瞬を、一枚の長い写真に収めることができるようになっていきます。

また、ゴールだけでなくレース全体を記録するため、昭和四十四年にはVTRパトロールが導入されました。これにより審判の精度が飛躍的に高まり、公営競技に不可欠な公正が保たれるようになりました。



着順判定に欠かせないスリットカメラの写真。現在はモノクロからカラーになっている。



スターターの赤旗合図を待つ人馬。(写真/中西関松)



現在の対面タワー。



左に見えるのが、かつての審判台「六角堂」。(写真/中西関松)



白シャツにゼッケンを着けた騎手たち。初期の頃は現在よりも出走馬が多く、このレースでは15頭立てだったことが分かる。(写真/中西関松)